



寄書

本誌第十號に掲載したる懸賞質問題「婦人の側より見て理想的の夫とは如何なる資格を有せるものなるか」といへるに對し、讀者諸姉よりの解答文、先月十五日までに寄稿せられたるもの殆んど三十篇、記者は一々慎重なる検討と緻密なる判断とを以て、之が撰擇をなせしに、不幸にして、折角の寄稿の中には、餘りに空漠に失するもの、餘りに簡單にして文意の纏まらざるもの、餘りに簡單にして意志の貫徹せざるもの、若しくは語氣語聲の如何にも穩當を缺きて婦人らしからざるもの等多

く、殆んど失望に終らんとせし最後に到着せる左の一篇、未だ以て上乘とは至らざるも、議論の穩當なる文意の正整なる、蓋し數十篇中比較的優等と見做さるべきを以て、即之を以て當撰文となして茲に掲載し、當撰者に向つて。本誌一ヶ年分(本誌)を呈し、併せて發題者に向つて本誌半ヶ年分(同)を呈することとせり、

理想的の夫の具備すべき資格
の質問に對して答ふ

京都 太田 きみ子

理想的の夫の具備すべき資格の主要なるものは次の三つの他に御座りませぬと考へます、

一 体格の強健

一 性情の美

一 専門的の學藝

是れから上記のものを細説しまして、其理由を述べます、

(第一) 体格は強健でなければなりませんとい考へます、つまり骨、筋肉、血管、神經等が充分に發育して居りませんときには、熱心に充分其業務に従事する事が出来ませず、又健全な子を擧げせしめて、子孫を繁殖する事が出来ません。

容貌の點に就きましては、五管器の解剖的位置と、生理的機能さへ尋常でありましたら、色の黑白鼻の高低眼の大小等は論じません。

(第二) 性情の美と申ますと、範圍も廣くなかく六ヶしふ御座りますが、兎に角親切で諸事「誠」を

以て處せられたいので、つまり自分の父母妻子は異体同心と云ふ心持で皆自分の身体の半面であると云ふ考へを持ってをられ度事と思ひます、いつでも此考へを持ってをられましたら、藝者狂ひをするとか、或は夜遊びをするとか、又は深酒をするとか、業務を怠るとか、は出来ない事で御座りましょうと思われれます。

一寸其例を申して見ますると、其遊びをしてぬられまして自分は面白く楽しく遊んでぬられましても「家にゐる妻は今頃何をしてゐるであらう?」此寒ひに針仕事でもして湯を沸してさぞ待詫びてゐるであらう平常ならば、夢温き此真夜中に空車の音にも胸ときつかせて、起てゐたらどれ位つらい事であらう?」など考へ起されました時には、今迄の興は忽ち醒めてしまひまして直ぐに我も妻も

一つの身体である、其半面の自分の樂みは他の半面の彼の苦みであると云ふ考へが起りました。

そうなりますと夜遊びなどはなさらない様になり
ますと共に、又「どうしたら共に樂しみ共に愉
快に遊ぶ事が出来よう？」と云ふ御考が出来まして
遊山なり旅行なりしまして家族を擧げて共に樂し
み平和の家庭を造る事が出来ようと思ひます。

先に申しました様な御心掛けが御座りましたら品
行は自然によく自分の業務にも熱心に従事せられ
まして百般の事が皆都合よく参ります事と考へま
す。

(第二學藝で御座りますが是れは専門の學科を脩
めて、其技藝に熟達して居られましたら、宜しい
ので科目は藥劑家でも、文學家でも、商業家でも、
技術家でも、其何れを撰びません。

其他に財産や族籍學位等の有無は構ひません、私
は儀式的或は外觀的の結婚でなしに、夫の心と
精神的の結婚(心と心の化學的結合)がしたので
す、詳しく申しますと、理學的器械的の混合では
第一の心の分子と第二の心の分子とが別々に存在
してをりますが、化學的の結合では第一の心の原
子と第二の心の原子と化合しまして一個の第三の
分子を造ります、此分子から成立ちました心は最
早第一や第二の分子の特性を失ひまして第一第二
の兩つの性を帯びた獨立の性質を現わします。私
は斯様に夫の心と化學的の結合がしたいと考へて
をります。

澁かるか知られぬ柿の初さきり 千代女